



ペドロ・メイエル

ユニバーサル・シアター

ミラマール・コレクション

ミラマール・コレクション

60年以上にわたるキャリアと100万点を超える写真アーカイブを有するペドロ・メイエルは、絶えず進化し続ける自身の作品を通じて、多様な物語を共有するという使命を担っています。これらの物語は、彼の写真家としての視点のみならず、長年にわたり写真界に貢献してきたその活動の一端をも映し出しています。

ミラマール・コレクションは、50年代から現在に至るまでのメイエルの写真表現の発展を記録した、全41巻以上に及ぶ自伝的かつ回顧的な叢書です。最新技術であるAIの導入に至るまで、その軌跡を網羅した記録といえるでしょう。

ユニバーサル・シアター

本書は、1980年代におけるミゲル・デ・ラ・マドリの大統領選挙キャンペーンを題材にした、ペドロ・メイエルによる写真エッセイを収録しています。メキシコの政治を、国民が「民主主義」という名の舞台上でそれぞれの役を演じる巨大な演劇として描き、PRI(制度的革命党)が権力を厳格に掌握していた時代の構造を浮き彫りにします。

ロヘリオ・ビジャリアルによる歴史的背景と、ルベン・アギラールの分析を通して、この作品は“最後の大規模な政治的プロダクション”とも言うべき出来事を精緻かつ象徴的に解釈します。読者をして、民主主義の本質を問い直し、メイエルの視覚的証言をメキシコの歴史と写真表現の中で特異な記録として再評価するよう促す内容となっています。

法務情報(レガレス)

出版基金
ペドロ・メイエル財団

コレクション企画統括
マリソル・モリーナ

ペドロ・メイエル・アーカイブ
エレナ・ロサレス

書籍編集
ロヘリオ・ビジャリアル

書籍共同編集
アレクシス・オルティス

画像ポストプロダクション

ペドロ・メイエル

アレクシス・オルティス

テキスト執筆

ペドロ・メイエル

ロヘリオ・ビジャリアル

ルベン・アギラール

文体校正

テレサ・マルティネス

編集監修

パブロ・メイエル

印刷管理

マヌエル・ガルシア

エディトリアル・デザイン

アレクシス・オルティス

カルロス・メンドーサ

制作アシスタント

アレサンドラ・ベルメホ

エリフ・ソリアーノ

フェルナンダ・レオン

リカルド・ガルシア

© ペドロ・メイエル, 2025

www.pedromeyer.com

本書のいかなる内容も、著作権者またはその継承者による事前の書面許可なしに、アナログ・デジタルを問わず、いかなる方法・目的でも複製することを禁じます。

メキシコシティ・コアカンにて編集

メキシコ・オアハカにて印刷

ミラマール・コレクション

ISBN: 978-607-29-7238-4

ユニバーサル・シアター (El Teatro Universal)

ISBN: 000-000-00-0000-0

5言語(ドイツ語、フランス語、イタリア語、中国語、日本語)での翻訳版へのアクセス用QRコード

すべてのメキシコの民主主義を守る人々へ。

テレトン万歳
— ペドロ・メイエル

私の目の前には、ほとんど不可能に近い撮影の課題があった。少なくとも当時の技術では、私にはそう思えた。私はメキシコシティのアトランティコ銀行の年次報告書のために撮影をしており、クライアントは同銀行の広告担当者、アレハンドロ・オールドリカだった。

課題は、向かい合う二つの銀行ビルのファサードを、一枚の写真の中に同時に収めること。ひとつは半植民地風の古い建物、もうひとつはガラス張りのモダンなビル。まるで時代の対話のような構図だった。

私は、朝の特定の時間にもう一方の建物を美しく反射するモダンなファサードを撮ることを思いついた。午前7時53分、星の配置まで調べて完璧な反射が得られると確信し、Sinar製の4×5インチ判カメラを二階の小窓に据えた。

写真はうまく撮れたが、私はさらに良い結果を求めてもう一度挑戦したいと思った。銀行には追加料金なしで再撮影を提案した。プロとして当然の責任だと考えたからだ。

まさかその何気ない提案が、後に運命的な出会いをもたらすとは思いつかなかった。数か月後、すでに銀行を退職していたオールドリカから連絡があり、当時のPRI候補、ミゲル・デ・ラ・マドリの大統領選挙キャンペーンを記録する写真集の制作に参加してほしいと言われたのだ。次期大統領の歴史的記録を残すという、時代と政治の象徴的な依頼だった。

1981年から1982年にかけての10か月間にわたり候補者を撮影する契約を結ぶ際、私たちは当時としては異例のことを取り決めた——それは著作権の保持である。多くのクライアントは、写真を購入すれば自動的に知的財産の権利も得られると考えていたが、私はその慣習に異を唱えた。

私にとってこの仕事は、政治的な動機でも、後々の利益を期待する「コネ」でもなかった。単に興味深いテーマであり、適正に報酬が支払われるから受けたにすぎない。ただし、自分の作品の権利を失うようなら引き受けるつもりはなかった。

幸いにも、理解のある人々に恵まれ、著作権は私に帰属することで合意が得られた。報酬の取り決めの後、撮影した全てのネガとプリントは私の手元に残ることとなった。

ところが、思いがけないことに——その本はついに出版されなかった。その理由については、後ほど触れることにしよう。

撮影を始めて驚いたのは、キャンペーンに割り当てられた写真家の多さだった。外部メディアならまだしも、PRI党自身にも専属の撮影チームがいて、彼らは毎日、候補者の活動をまとめた「一冊の写真集」を作っていた。もちろん、これはデジタル以前の時代の話だ。専用の現像所が24時間体制で稼働し、翌朝には前日の活動記録が製本されて候補者の手に渡る——そんな仕組みだった。私は「なぜ同じ仕事を二重に？」と疑問に思ったが、興味深い本を作れる可能性があるのなら、口を出す理由はなかった。

むしろその環境は、私の関心をどこに向けるべきかを明確にしてくれた。全国各地で繰り広げられる多様で陽気な市民参加——それはまるで壮大な舞台劇だった。ひとりには「次の大統領」という主役として登場し、その周りにはいつも拍手を送る取り巻きがいる。やがてそれぞれが自分の「持ち場＝権力の一部」を差し出し、国家という名の大劇場が完成していく。選挙とは、その既に演じられた芝居の最終幕にすぎないのだ。

私にとってそれは政治的な問題というより、人間の本質を映す舞台だった。哲学者や詩人、科学者、芸術家の言葉が頭をよぎる。他のカメラマンたちは日々の締め切りに追われていたが、私は自分の時間の中で、自分の語り口を紡ぐことができた。写真自体の優劣ではなく、全体としての物語性こそが、私の仕事に独自性を与えていた。

7000万人の国民全員が、自発的にその「舞台」に参加する——しかも結末を誰も疑わない。そんな国は、ギネス記録級の現象だった。

そんなある朝、当時の大統領ホセ・ロペス・ポルティエヨが宣言した。「もう我々は略奪された！二度と略奪させはしない！」そしてメキシコの民間銀行を国有化したのだ。直後に通貨切り下げと金融危機が続き、デ・ラ・マドリ陣営の予算は大幅に削減された。こうして、私のプロジェクト——そして本——は中止となった。

写真の権利は私にあったが、もはやクライアントはいない。新大統領となった彼に本を持ち込むことはしなかった。写真が誤用されることを恐れたからだ。とはいえ、野党に売ることもできなかった。道義的に許されないと考えた。結局、その写真たちは長いあいだ私のアーカイブに眠ることとなった。

そして今——COVID-19のパンデミックによる隔離生活の中で、私は封印していた作品群をまとめ直すことを決めた。長年信頼を寄せる二人の友人、ロヘリオ・ビジャリアルとルベン・アギラールが、この写真群に文脈と息吹を与える編集・執筆を引き受けてくれた。彼らの洞察と友情によって、この作品はようやく歴史的・社会的な枠組みの中に位置づけられ、かつてPRIの覇権下に生きた時代を知らない新しい世代にも、理解されうるものとなったのである。

偉大なるユニバーサル・シアター
ロヘリオ・ビジャリアル

「大切なのは、他の人には見えないものを見ることだ。」

— ロバート・フランク

喜劇、悲劇、そして悲喜劇について

本書に収められた写真群は、壮大な演劇のわずか一幕を丹念に記録したものである。

その演劇は、史上最も長く、最も広大な舞台上で上演されたものの一つ——ほぼ一世紀にわたり、国全体を舞台とし、何百万人という人々が俳優、エキストラ、観客として参加した国民的な大芝居だった。

この壮麗な劇団は、長い年月をかけて演出の細部を磨き上げ、脚本を洗練させ、主演から脇役に至るまでの演技を完璧なものに仕上げている。

この壮大な作品の名は「大統領選キャンペーン」。

多くの喝采を浴び、成功を収めたが、しばしばその内容は喜劇というより、むしろ風刺劇や不条理劇の領域に近づいた。

それでもなお、この演目はあまりに成功したため、他の劇団(政党)までもが自らの俳優陣でこの作品を模倣しようとしたのだ。

第一の呼び出し

「演劇は決して消えることはない。なぜなら、それは人類が自らと向き合う唯一の芸術だからだ。」

——アーサー・ミラー

この言葉ほど、ペドロ・メイエルのカメラが捉えた出来事にふさわしいものはないだろう。

それは、メキシコ現代史におけるひとつの象徴的瞬間——PRI(制度的革命党)の大統領候補、ミゲル・デ・ラ・マドリの選挙キャンペーンである。

ただし、より広く捉えれば、この記録は歴代のPRI候補者たちのすべての選挙運動にも当てはまる。

そこでは例外なく、全国民が何らかの「役」を演じることになっていた。

主役、助演、何百万という群衆のエキストラ、そして敵役までも——全員が台本に従い、完璧に配置されていたのだ。

それは、一つの巨大な舞台劇であり、その残響と余波はいまなおメキシコ社会の中に生き続けている。

メキシコの党

この写真集に収められたイメージは、ある政党がいかにして権力を永続させたかを記録した、最も包括的な証言の一つである。

その党は巧妙かつ鋭敏な戦略によって、自らを祖国・民主主義・正義・進歩の化身として国民に信じ込ませた。

そして、それに異を唱える声は——あったとしても——沈黙させられ、弾圧され、投獄され、あるいは命を奪われた。

かつて「革命の理想を継ぐ政党」として誕生したこの組織は、やがて権力集中・独裁的慣行・腐敗によって形作られた一党支配体制へと変貌した。

作家マリオ・バルガス・リョサが1990年にそれを「完璧な独裁 (la dictadura perfecta)」と呼んだのも当然だろう。

人は変わっても「有効な投票、再選なし」というスローガンのもとに、党そのものは存続した。

6年ごとに大統領が交代しても、権力の集中は変わらず——大統領は単なる行政の長ではなく、「革命の伝統の継承者」であり、「国民統合の象徴」でもあった。

さらに大統領には、後継者（次期候補）を指名する権限があり、「民選」と呼ばれるすべての公職候補を事実上決定する力を握っていた。

PRIの外で政治的キャリアを築くのはほぼ不可能であり、長年にわたり唯一の形式的な野党であったPAN(国民行動党)を除けば、その世界は閉ざされていた。

その現実を象徴するように、政治家であり記者でもあったセサル・“エル・トラクアチェ”・ガリスリエタは、後に信条ともなる有名な言葉を残した：

「予算の外で生きることは、誤りの中で生きることだ。」

(=政治の庇護の外で生きる者は敗者である、という皮肉を込めて。)

この壮大な国家的スペクタクルには、何百万もの人々が何十年にもわたり参加していた。

彼らは6年ごとに繰り返し、同じ候補者のような演説、同じ約束を聞くために集まった。

それは全国各地、州から町村に至るまで、完全に再現された選挙劇——すべてが入念に準備され、綿密にリハーサルされた演出だった。

群衆で埋め尽くされた広場や講堂、無数の横断幕やポスター、数百万枚のチラシ。

地元ボスや州知事との豪勢な宴会、候補者と地方権力との間で交わされる支援の約束、抱擁と握手。

そして最高潮となる選挙の日——結果はいつも同じ。勝つのは、決まってその候補者だった。

正々堂々とあれ、不正によってあれ。

ペドロ・メイエルの写真は、この超越的な政治演劇のあらゆる瞬間を克明に記録している。

どの町でも繰り返された群衆の歓迎、官僚たちの握手の列、記者とカメラマンの群れ、豪勢な宴、贈り物、民族舞踊や学生劇、若者たちの熱狂。

労働組合の忠誠の再確認、先住民や農民からの嘆願、笑顔と拍手、抱擁と視線。

そのすべてが、暗黙の合意と共犯関係の上に築かれていた。

「すべてを変えなければ、何も変わらない」——ランペドゥーサの言葉どおりに。

メイエルが言うように、1981～82年のミゲル・デ・ラ・マドリの選挙キャンペーンを撮影した数か月間、彼はまるで巨大な国立劇場で繰り返し上演される壮大な劇を目撃していたのだ。

登場人物たちはそれぞれの役を完璧にこなし、台本どおりに動く。候補者の「指名」発表、演説、約束——すべてが予定調和。

観客も俳優も、結末をよく知っていた。

6年間の「黄金時代」、候補者はやがて「偉大なるトラトアニ（支配者）」となる。

他の登場人物も役割を果たす。

州知事、実業家、大企業も中小企業も、労働者組合、建設労働者、農民、そして貧しい人々——皆が自らの「役」を演じた。

彼らは貧困からの解放を夢見ながらも、結局はいつものように与えられる恩恵、音楽、祭り、使い古された約束に満足し、受け入れていった。

体制を維持するための最初の戦略は、大統領への権力集中であった。

PRIは大衆政党として、労働者・農民・市民組織をすべて掌握し、同時に制度を構築しながら腐敗を拡大させた。

政治家カルロス・ハंक・ゴンサレスの皮肉な名言がそれを象徴する：

「貧しい政治家は、出来の悪い政治家だ。」

確かに経済は成長していた。だが、それ以上に格差も拡大していた。

PRIの支配は選挙でも周到に演出された。

そこには滑稽なまでの不正の数々——まるで「選挙という名の茶番劇」だった。

アカレオ：投票者をバスやトラックで運び、食事・飲み物・帽子・Tシャツを配って投票させる。

エンバラサーダ：投票箱を事前に「妊娠」させ、特定候補の票を詰め込んでおく。

ラトン・ロコ：反PRI票を避けるため、有権者名簿を改ざんして特定の名前を削除し、投票できなくさせる。

ウニャ・ネグラ：反対派候補の票を密かに汚して無効にする手口。

カリユセル：偽の身分証を使って何度も異なる投票所で投票する組織的な集団。

これらすべてを統括していたのがマパチェ (Mapache) ——選挙工作を指揮し、すべてを滞りなく進行させる「裏方の演出家」だった。

第二の呼び出し
PRIはメキシコであり、その逆もまた真なり
ロヘリオ・ビジャリアル

1964年、私は8歳だった。

当時、私たちはメキシコシティ南部のウニダ・インデペンデンシア住宅団地に住んでいた。人口はまだ500万人に満たない頃である。ある日、両親に連れられて、建設が完了したばかりのペリフェリコ

南環状線の開通式を見に行った。

この道路は、かつて「エル・バタン」と呼ばれた旧農園跡地に建てられた社会保障住宅群(IMSSの被保険者向け)を横切っていた。

日曜の朝、朝食を終えて出かけたその日は、まさに政治的祝祭のような一日だった。

当時の大統領はグスタボ・ディアス・オルダス(1964-1970)。

彼は色とりどりの紙吹雪の中を通り抜けながら群衆に手を振っていた——まさにこの本に収められた多くの写真で見られる、あの紙吹雪だ。

彼の後ろには官僚たち、そして大勢の一般市民が続き、笑い、叫び、拍手を送っていた。

私たちは歩道からその光景を見守っていた。確かに、それは「進歩」を象徴する重要な出来事だった。

私たちの暮らす住宅団地そのものもまた、PRIが建設した“進歩の象徴”だった。

赤レンガの家々と中層住宅、広い歩道、遊具、公立クリニック、劇場、映画館、スポーツセンター、市民広場、三つの小学校と三つの幼稚園、IMSSのスーパー、商店街、そしてコンベンションセンターまで——すべてが国家と党の「恩恵」として提供された。

だがその4年後、1968年10月2日、ディアス・オルダスはトラテロルコ虐殺によって悪名を轟かせ、党の「もう一つの顔」が露わになることになる。

私が初めてメキシコの大統領を見たのは、1962年6月のことだった。

アドルフォ・ロペス・マテオス(1958-1964)が、当時の米国大統領ジョン・F・ケネディとその妻ジャクリーンをメキシコシティに迎えた際だ。

彼らは国立人類学博物館、ベルサレス宮殿、グアダルルーペ聖母大聖堂、独立記念塔、革命記念碑などを訪れたが、その行程の中に、なんと私の愛するウニダ・インデペンデンシアも含まれていたのだ。

その日、私たちは広場から彼らを見上げ、まるで歴史そのものを目撃しているような気持ちだった。

ジャクリーンとジョンがかつて新婚旅行でアカプルコを訪れたことは知っていたが、まさかこんなに近くで見ることになるとは思わなかった。

ロペス・マテオス大統領は興奮気味で、ケネディ訪問を自らの政権への支持と受け止めていた。

この訪問は、OEA(米州機構)での「キューバ問題」をめぐるメキシコと米国の緊張関係を和らげる機会でもあった。

1964年3月、私は同じ広場で再びロペス・マテオスを見た。

今度はフランスのシャルル・ド・ゴール大統領を伴ってのことだった。

しかしこの訪問は米国の機嫌を損ねた。冷戦の真ただ中で、元米国大統領ハリー・S・トルーマンはこう発言した。

「ド・ゴールは、ラテンアメリカにおけるアメリカの地位を損なおうとしている。

もし彼がアメリカの問題に首を突っ込み続けるなら、その鼻を切り落としてやるべきだ。」

(『ノバダデス』紙、1964年3月18日号)

ルイス・エチェベリア・アルバレス(1970-1976)の姿も数回見かけた。

最初は就任の日、サン・ヘロニモ地区の自宅から国会へ向かう車列の中で、いつものように紙吹雪と群衆の歓声に包まれていた。

その後の歴代大統領たちには、直接会うことはなかったが、ニュースを通じて彼らの行動を知った。

ホセ・ロペス・ポルティエーヨ(1976-1982)は「我々は富を管理することに慣れなければならない」と国民に語ったが、政権の終わりは惨めなものだった。

ミゲル・デ・ラ・マドリ(1982-1988)には数回会っている。

1990年から2000年にかけて、彼は**経済文化基金(FCE)**の代表を務め、私は校正者として働いていた。

多くの資料によると、彼は編集部門やデジタル出版を近代化し、FCEを効率的に改革したとされている(「El FCE destaca trabajo de De la Madrid」『Expansión』2012年4月1日)。

これは、1985年のメキシコシティ大地震で彼が数日間何もできずにいた“無反応な指導者”としての印象とは、まったく対照的だった。

デ・ラ・マドリの後にはカルロス・サリナス、そしてエルネスト・セディージョが続いた。

彼らすべてに光と影があり、もちろん全員がPRI出身者だった。

だがそれは単に党员であるという意味ではない——

彼らは、国民の精神構造そのものに深く根を下ろした政治文化の産物だったのだ。

では、こう問うべきだろう。

「PRIがメキシコを形づくったのか、それともメキシコ人の気質がPRIを形づくったのか？」

この党が何十年もの間、政権を維持できた理由——

それは、旧ソ連の共産党よりわずかに短いだけの、世界でも稀な長期支配の記録である。

PRIの強さの秘密のひとつは、その**堅牢なコーポラティブ構造(企業組織的体制)**にあった。

そこでは、国の労働者階層が明確に分けられていた——石油労働者、教師、農民。

それぞれが党の内部で「部門」として組織化され、統制のもとに置かれていたのである。

本書の58~65ページに掲載された写真には、その象徴的な光景が広がっている。

候補者と労働組合の指導者たちが登壇する巨大なスタジアムでの集会。

何十万もの人々が声を合わせ、指導者たちを称え、前大統領の巨大な肖像画の前で、次の候補者を熱狂的に歓迎している——

まさに、忠誠と支配の儀式のような光景である。

スポットライトの下で
「動いた者は写真に写らない」
ロヘリオ・ビジャリアル

写真の中のフィデル・ベラスケスに、ぜひ注意深く目を向けてほしい。

「動く者は写真に写らない」——1976年、彼がそう言い放ったのは、大統領ルイス・エチェベリアが後継者としてホセ・ロペス・ポルティエーヨを指名しようとしていた時期のことだった。

当時、次期大統領候補として名の挙がっていた者の中に、内務大臣のマリオ・モヤ・パレンシアという男がいた。彼はあまりにも「動きすぎていた」。

この言葉は、そんなモヤに対する冷ややかな忠告であり、他の「大統領候補たち」にも従順さを保てという警告でもあった。

ベラスケスは、1936年から1997年まで——わずか数年の中断を除き——**メキシコ労働者総連合（CTM）**の指導者を務めた人物である。

その発言のひとつ、「銃で権力を得たのだから、票では失わない」は、1980年代に野党が勢力を伸ばし始めた頃の皮肉な象徴として知られている。

彼はメキシコ政治史において最も特異な存在のひとりだった。

CTMを通じて多数の議席や公職を手に入れ、党・政府・国家の三位一体構造を支える本物の柱であり、**カウディーリョ（支配的ボス）**そのものだった。

ペドロ・メイエルは、ほぼ半世紀にわたってメキシコ政治の中枢に君臨したこの人物を、ありのままに捉えている。

いつも黒いサングラスをかけ、感情の読めない顔をした硬直したトーテムのような存在。

当時の政治コラムニストたちは、彼を「スフィンクス」と呼んだ。

1982年の連邦選挙では、公式候補のほかに、

- パブロ・エミリオ・マデーロ（**PAN**: 国民行動党）
- アルノルド・マルティネス・ベルドゥーゴ（**PSUM**: 統一社会党）
- ロサリオ・イバラ・デ・ピエドラ（**PRT**: 労働者革命党）
らが大統領選に立候補していた。

メイエルの写真には、その多様な政治の風景が克明に刻まれている。

壁には**PRT**のポスターが貼られ、イバラ候補への投票を呼びかけている。

別の壁には**PSUM**やマルティネス・ベルドゥーゴのスローガンが描かれている。

そして、短い連続写真の中では、これらの「落書き」をした若者たちが逮捕され、

メイエルによれば、その後、暴行を受けたという——

まさに言論と権力の衝突を象徴する瞬間であった。

幕間（ENTREACTO）

— ロヘリオ・ビジャリアル

「カメラは、人に“カメラなしで見える方法”を教える道具である」

——写真家ドロシア・ラング

まさにその言葉どおりのことが、ペドロ・メイエルの写真を前にすると起こる。
彼がミゲル・デ・ラ・マドリの大統領選キャンペーンを撮影した期間は、1980年から1981年のわずか7か月間にすぎない。
それなのに、彼のレンズはまるで20世紀のすべてのPRI候補の選挙を、国の端から端まで記録したかのような錯覚を与える。

彼の写真——時代を超越したようにも見えるイメージ——をたどることで、私たちは現代メキシコ史の大きな断面を歩むことができる。
それは、国民の気質の多くを取り込み、それとほとんど同化していたPRI体制の時代だ。
何十年にもわたって、PRI政権は父権的で権威主義的、制度的でありながらボスの、近代的でありながら伝統主義的でもあった。
制度を築き上げる一方で、腐敗を社会の歯車を潤滑させる仕組みとして機能させていた。

インターミッション:最初に革命ありき

20世紀の大半において、メキシコの政治舞台をほぼ完全に支配したのは**制度的革命党(PRI)**ただひとつだった。
正確には半世紀——1946年1月18日、この名前で正式に誕生したのである。

作家マリオ・バルガス・リョサはそれを「完璧な独裁」と呼んだが、
オクタビオ・パスは1990年8月30日、テレビサのスタジオで行われた「Encuentro Vuelta: La experiencia de la libertad」の中で、それをこう訂正した。

「それは独裁ではなく、支配のためのヘゲモニック・システムである。」

そして歴史家ダニエル・コシオ・ビリャスは1972年にこう評している。

「民主的・共和的な形式によって正当化された、一種の世襲的君主制であった。」

1927年、1917年憲法が改正され、すでに1920～1924年に大統領を務めたアルバロ・オブレゴンの再選が可能となった。
だが、1928年7月、宗教戦争の信徒ホセ・デ・レオン・トラルによって暗殺され、その野望は潰えた。
この危機の中で、当時の大統領プルタルコ・エリ阿斯・カリェスはこう宣言した。

「メキシコはカウディーリョ(個人支配者)の時代を終え、制度の時代へ進まなければならない。」

そして1929年3月4日、ケレタロ市の共和国劇場で党大会を招集し、新たな政党の設立を宣言。
候補者としてパスクアル・オルティス・ルビオを擁立し、対立候補ホセ・バスコンセロス(反再選主義党)に勝利した。

こうして誕生したのが、国民革命党(PNR)である。

この党は1910年の革命運動から派生したさまざまな派閥——カランサ派、ピリャ派、オブレゴン派、サパタ派——を統合したもので、そのスローガンは「制度と社会改革」。ロゴマークにはすでに1821年の「三色旗(バンダ・トリガラランテ)」の色が使われていた。

PNRは、政治的競争の場で最も強力な制度として機能し、「安定した社会秩序のもとで選挙による政権交代を可能にした」(カサソラ, 1992)——そして当時としては一定の進歩的・左派的性格を持っていた。一方で、ヨーロッパの動向を反映するように、国内にもファシズム的傾向が芽生えつつあった。

1936年、**ラサロ・カルデナス大統領(1934–1940)のもとで、PNRはメキシコ労働者総連合(CTM)を創設。

これが労働運動の中核となった。

1938年には全国農民連合(CNC)**を設立し、さらに1943年、**マヌエル・アビラ・カマチョ大統領(1940–1946)の時代に全国民間団体連合(CNOP)**が設立された。

この3大組織——CTM・CNC・CNOP——によって、党は労働者・農民・市民層を完全に掌握した。さらに、かつての軍事派閥も統合され、党の「第四の部門」となった。

カルデナスは同時に国立ポリテクニク大学(IPN, 1936年)やメキシコ大学院大学(El Colegio de México, 1940年)を設立し、以降、数え切れないほどの機関・組織・労働組合・連盟が次々と誕生していった。

その略称の海——文字通り“アルファベットスープ”のような世界——こそが、メイエルの写真の中で政治キャンペーンの背景として無数に現れる。

1938年、国民革命党(PNR)は再編され、メキシコ革命党(PRM)として再出発した。そのロゴには再び緑・白・赤の三色旗——国家を象徴する色——が掲げられた。PRMは大衆政党というより、むしろ「コーポラティブ(団体)政党」であり、基盤となるのは個人ではなく労働組合や農民組織などの団体であった。「党を構成するのは組織であり、“組織化された人民”である」(Córdova, 1989)。

1946年1月18日、党は第三段階に入り、名称を制度的革命党(PRI)に改めた。新しいスローガンは「民主主義と社会正義」であり、軍部の影はすでになかった。これは「将軍たちから民間人への大統領職の移譲、すなわちミゲル・アレマンを候補に据えた“革命の子”による権力の継承を象徴するものであり、“制度化された革命”という逆説を生み出した」(González, 2012)。

歴史家エクトル・アギラル・カミン(本書では当時の妻アンヘレス・マストレッタとともに登場)によれば、「PRIはPRMを終わらせるために創設された。PRMが持っていた社会主義的・共産主義的傾向は、冷戦初期におけるメキシコとワシントンの“産業化と反共主義”という根本的合意にそぐわなかったからだ」。そして「PRIの支配下でメキシコは確かに変化した。1940年代の産業化から1990年代・2000年代の再産業化、そして今日のT-MECまで、その変化の弧は巨大である」(Aguilar Camín, 2021)。

PRIはその長い政権の中で、変幻自在な党として数々の政策を展開した。1950年代の都市化の推進、1954年から1970年までの「安定成長政策 (desarrollo estabilizador)」、1968年の道徳的・政治的危機、1976年と1982年の金融危機、1980年代の経済自由化、1990年代の民主的移行、21世紀初頭の政権交代、そして2010年の「メキシコ協定」へと至る。

PRIの大統領たちは一様ではなく、単一のイデオロギーに縛られなかった。すべてが「革命的ナショナリズム」という広い傘の下に存在したため、その軌跡は大きな振幅を描いた。ミゲル・アレマン・バルデス(1946–1952)の改革的産業化からアドルフォ・ルイス・コルティネス(1952–1958)の保守主義、アドルフォ・ロペス・マテオス(1958–1964)の「憲法の範囲内での極左」——彼はダビッド・アルファロ・シケイロスを投獄し、農民指導者ルベン・ハラミージョを暗殺した——、グスタボ・ディアス・オルダス(1964–1970)の反共的偏執、ルイス・エチェベリアの「非同盟諸国運動」の幻想的リーダーシップ、ホセ・ロペス・ポルティエヨの石油バブルの陶酔、ミゲル・デ・ラ・マドリの反国家的緊縮路線、カルロス・サリナス(1988–1994)の「社会的リベラリズム」、エルネスト・セディージョ(1994–2000)の反サリナス的ネオリベラリズム、そしてエンリケ・ペニャ・ニエト(2012–2019)の新自由主義の最終章。皮肉にも、こうした歩みを経たPRIが2003年以降、社会主義インターナショナルに加盟しているのは興味深い。

一方で、党のもとで数多くの国家機関と公共制度が生まれた。保健省、ペメックス、メキシコ社会保障院、国立ポリテクニク大学、教科書無償配布委員会、道路橋公社、国立心臓病研究所、医科学・栄養研究所、連邦電力委員会、サグン市、大学都市、国立金融公社、経済文化基金、メキシコ大学院大学、国立芸術院、国立人類学歴史院、国立人類学博物館、連邦学校建設計画管理委員会など(González, 2012)。

しかし他方で、法の軽視と腐敗が常態化していたことも否定できない。「憲法は民主主義を掲げ、PRIは権威主義を行った。憲法は連邦制をうたい、PRIは中央集権を実践した。憲法は言論の自由を保証し、PRIは批判を抑圧した。憲法は三権分立を定め、PRIはそれを融合させた。行政権への従属、すなわち権力の一極集中こそがPRI体制の最大の特徴だった」(López Rubí Calderón, 2021

舞台裏 — 選挙キャンペーン — ロヘリオ・ビジャリアル

PRIは、深刻な財政危機に直面していたにもかかわらず、選挙キャンペーンに多額の資金を投じたことで野党から厳しい批判を受けた。ミゲル・デ・ラ・マドリはこう語った。「テレビとラジオを中心にすれば多くの経費を節約できるだろうが、メキシコの国民性は候補者に直接会い、自分の問題を訴える機会を求めるのだ」(Ceberio, 1982)。確かに、その“国民性”に関しては彼の言葉どおりだった。

エンリケ・クラウゼはこう書いている。

「6年ごとに行われる秘密の儀式——それは大統領が自らの後継者を選び、いや、むしろ“聖別する”儀式である。新しい大統領は誰にも説明責任を負わず、立法・司法の独立など名ばかりのものだ。[...]そして新しい大統領は、州知事や多数の上院議員、下院議員をも指名する。国庫の資金を惜しみなく使い、誠実な説得から強要や不正に至るまで、あらゆる合法・非合法な手段を駆使して。」

この秘密の儀式の後には、全国の町や村で演じられる“公開の儀式”——共犯と継続の再確認——が続く。地方ボス、労働組合の指導者、市長やその取り巻きたちは新しいトラトアニ（支配者）の前に整列し、手を差し出してキスを受け、音高く肩を叩き合い、力強く抱擁し、意味深な笑みを交わしながら、例の約束を繰り返す。拍手とご馳走の中で、ひとつの契約が結ばれる。ひとりとは皆のために、皆はひとりのために。

メキシコの風景は壮観だ。候補者とその一行は飛行機やヘリコプター、列車、そして移動執務室さながらの選挙バスで山々と平原を横断する。デ・ラ・マドリは顧問団、妻、二人の長男（その一人エンリケは、2022年時点で2024年の大統領候補として名が挙がっている）を伴って旅を続けた。ペドロ・メイエルはその道中の決定的な瞬間をとらえる。キャンペーン総責任者マヌエル・バルトレット（メイエルとはコレヒオ・アメリカーノ時代の同級生で「彼はちょっとしたいじめっ子だった」とメイエルは言う）の指示、息子たちエンリケとミゲルとの静かな時間、地図、ルート、戦略——。未来の大統領は窓の外を眺め、手を振り、思索に沈む。彼の政権は前任者ホセ・ロペス・ポルティエヨのものとは根本的に異なるものとなる。しかし彼はその時すでにそれを自覚していただろうか。ロペス・ポルティエヨは任期終了3か月前に銀行を国有化し、放漫財政の二期を終えた。デ・ラ・マドリは当時、計画予算大臣として経済運営の中心人物であり、のちに自ら大統領としてその危機に立ち向かうことになる。就任演説で彼はこう述べた。「祖国が我々の手の中で崩れ去ることを許さない。断固として行動する。」

どこに行っても、候補者を待ち受けるのは党や各団体の代表者たちである。彼らは揃って党への忠誠と次期指導者への服従を表明する。沿道には旗を振る支持者の長い列、笑顔、そして絶えない歓声。すぐに祝祭の空気が満ちる。紙吹雪が舞い上がり、ポスター、横断幕、三色のリボンが通りを埋め尽くす（メキシコは世界最大の紙吹雪生産国に違いない、と言いたくなるほどだ）。候補者の厳しい表情を写したポスターが建物の壁を覆い、メイエルはその無表情さを「まるでカリスマ性の欠片もない」と評する。妻パロマ・コルデロ・デ・ラ・マドリは花束や贈り物を受け取り、トリコロールのロゴは視界の至るところに繰り返し現れる。ある公用車には「革命的リアリズム（REALISMO REVOLUCIONARIO）」の文字。

農村のメキシコ、先住民と農民のメキシコは、都市の近代性と共存している。候補者のバスの前には農機具を並べた農民たちが立ち並び、兵士や労働者がその通過を見守り、あるいは演出された連帯を示す。ある講堂では、なおも現職のロペス・ポルティエヨの巨大な肖像画が掲げられ、デ・ラ・マドリが労働組合の集会で演説を行う。その光景はまるで旧ソ連の政治舞台のようである。

ペドロ・メイエルは細部を見逃さない。緑・白・赤の垂れ幕の隙間から顔を覗かせる黄色いシャツの男は何を見ているのか。その群衆の中で、ただひとり、カメラをまっすぐ見つめる視線がある。

どの町でも、候補者の訪問は宴の合図である。豊かな食事、音楽、踊り、体操の演技——祭りはどこまでも続く。先住民の舞踏、ブラスバンド、フォルクローレ、闘牛。人々の希望は再びかき立てられる。だが結果はいつも同じだ。すべてが変わり、そしてすべてが変わらない。

祭りの熱気の中にも、その外側にいる人々がいる。地面に座り疲れた老女、退屈そうな少女、長年の問題を抱える老人、そしてトリコロールのロゴを背景に立つ小さな靴磨きの少年——彼らもまた、この大なる舞台の一部である。

ペドロ・メイエルはデジタル写真の先駆者として知られ、彼自身の数多くの文章で繰り返し強調してきたのは、写真の改変や編集の正当性である。撮影の瞬間からすでにそれは始まっている——構図の選択、カラーかモノクロかという判断。その後、暗室での現像(アナログ写真ではもはや稀になった作業)やコンピュータ上での編集に続いていく。どの写真も、目の前にあるもの、見るもの、そして「意味がある」と判断したものを優先して写し取る。もちろん、画像の左右や上下には写っていない文脈がある。しかし、それは人間の視線そのものと同じである。メイエルは、私たちに「見せたいもの」を見せる——それが重要だからだ。彼の写真は、今日まで続く儀式の中の決定的な場面へと私たちを導く。そこには共犯的で、ときに皮肉な眼差しがある。「ねえ、これ見た？」——そんな問いかけが聞こえてくるかのようだ。

夜空を彩る花火、響き渡るロケットの音。「ビエンベニード・ア・アグアスカリエンテス」「ミゲルと共にある疎外された人々」「パラルもMMHと共に」「メキシコ人には幸福になる権利がある」「ミゲル、ここでは皆あなたを愛している」「ようこそデ・ラ・マドリ候補」「イスタパラパはここにあり」。

無数の記者、写真家、カメラマンたちが候補者の後を追ひ、旅のすべての瞬間を記録する。その様子はまるでフェリーニの映画『8½』のワンシーンのようだ。記事、写真、映像——それらは国中の新聞、雑誌、テレビにあふれ返る。しかし、その群れの外側に、一人の写真家がいる。彼は彼らをも被写体としてフレームに収める。ペドロ・メイエルは彼らと同じように仕事をする。現実を記録する。しかし彼の写真はそれ以上のものだ——一枚一枚が、コメントであり批評なのだ。彼と他の報道陣の違いは明確である。彼らのレンズが向くのは常に未来の大統領——その身振り、表情、視線——そして周囲の官僚や党幹部、群衆の熱狂。その画面の隙間には、観察、皮肉、偶然の物語が入り込む余地はない。だがメイエルは、そうした周縁、舞台裏、沈黙の瞬間をも捉える。彼の視線には、候補者を取り囲むすべて——支持者と懐疑者、演技と現実——が含まれている。メイエルの写真は、矛盾に満ちた広大な現実全体を描くのだ。

歴史家ビクトル・ガジョルはこう記している。写真の発明は「現実を正確かつ客観的に再現できる」という幻想とともに誕生した。そのため報道写真は「真実の証拠」とみなされてきた。だが、写真家は単なる機械的な媒介者ではない。その介入によって、被写体の意味は無数に変容する。

メイエルは、その危うさを熟知している。写真は、最初一枚からすでに“操作された真実”であることを誰よりも知っている。だからこそ彼は、写真エッセイにおいて報道的誠実さ——倫理、真実性、公平性——を重んじる。ただし、それは彼自身の視点を排除することではない。アンリ・カルティエ＝ブレッソンが言ったように、「無垢な写真など存在しない」のだ。メイエルはそれを理解している。候補者たちが語る繁栄・発展・平和・雇用・教育・正義の約束——その明るい言葉の裏に、彼は貧困、倦怠、腐敗の現実を写し出す。

ガジョルは、第二次世界大戦中にナチス占領下のパリを撮ったイタリア人写真家アンドレ・ズッカの例を挙げる。ズッカの息子ピエールが後にその写真展を開催したが、結果的に父の作品は逆効果を生んだ。写真には、ナチス占領を受け入れ、平穏に暮らすパリ市民の姿が写っていた。通りを歩く男女、遊ぶ子どもたち——すべてが幸福そうで、まるでドイツ兵の存在を歓迎しているかのようだった。ズッカは1936年からドイツで製造されていた新しいカラーフィルム「アグファカラー」を使って撮影していたが、それはナチスのプロパガンダ誌『シグナル』のための仕事だった。写真の倫理が、そこでは殺されていた。

ペドロ・メイエルの写真も、PRIの情報宣伝局に依頼されて撮影されたものだ。であれば、候補者や党に好意的な内容になると誰もが思うだろう。だが実際にはそうではなかった。彼の写真は党の宣伝には使えなかった。少なくとも、通常の意味でのプロパガンダにはなり得なかった。興味深いことに、PRIは一流の写真家を雇いながら、その写真家が自らの視点と思想で作品を制作することを許したのだ。急ごしらえで印刷され、地方の小さな商店の壁に貼られた一枚の候補者の肖像——それが唯一の例外だった。

「ルネサンス。私たちはこうして投票する」。その言葉が書かれたポスターを、ひとりの若い女性が掲げている。彼女は貧しく、疎外された存在に見える。おそらくアカプルコ郊外のスラム——インフラのない過密地域——に暮らす住民だろう。胸には金色の帯、髪影がかかる顔には諦念と懐疑が混じった表情が浮かぶ。「シウダー・レナシミアント(ルネサンス市)計画は、持続可能性の理念を掲げて始まったが、実際には観光地区以外の地域の生活環境は改善されず、インフラ不足と無秩序な拡張が進み、都市の周縁と中心部との格差は拡大した」(López Velasco et al., 2012)。約束は果たされず、祈りは届かなかった。

とはいえ、写真には笑いや連帯の瞬間もある。友情、連帯、誇り。最新のファッションに身を包む者もいれば、先祖の衣装を纏う者もいる。金髪の本ノイトの青年、陽気なアフロ系の家族、祈り続ける老女、勲章を胸にした元革命兵。塀の上で子を抱え、薬の処方箋を差し出す父親。バットマンや骸骨に扮した男たち。表情の多様さは驚くほどだ。「老いも若きも、白人もメスティーソも、将軍も労働者も学士も、メキシコ人は皆、自らを覆い隠す存在だ。顔を覆い、笑みを覆う」とオクタビオ・パスは書いた。

匿名の人々と公職者たち——皆が同じ劇の登場人物だ。選挙キャンペーンという名の演目は、毎回完璧に演じられる。偉大なるユニバーサル・シアター。権力の儀式。壮大な茶番。私たちは皆、その中で共犯者であり、証人であり、演者でもある。望もうと望まないと、それぞれの役割を演じるのだ。ネオンの看板がこう光る——「メキシコは偉大だ。その運命もまた偉大だ」。だがその運命とは、決して届かない地平線のようなものである。

「政治家とは街角の映画館のようなものだ。最初に中へ誘い込み、そのあとで上映内容を変える。」——スペインの風刺作家エンリケ・ハルディエル・ポンセラのこの言葉こそ、20世紀後半から今日に至るメキシコの物語を最もよく言い表しているのかもしれない。いまやPRIはかつての栄光の日々のかすかな影にすぎないが、その遺産はメキシコ人の慣習や思考の中に今なお息づいている——あるいは、その逆だろうか。過去を見つめ、現在を理解し、未来へと歩む力を持つ。聖書的規模の大仰な茶番劇——偉大なるユニバーサル・シアター——を、私たちの政治文化からこそ取り除くべきである。

ミゲル・デ・ラ・マドリは2012年に死去した。2009年5月、彼はラジオインタビューでカルロス・サリナスが秘密予算の資金を横領し、その弟ラウルが麻薬取引と関係を持っていたと告発した。しかし後日、公開書簡でその発言を撤回し、「質問に適切に応じられる精神状態ではなかった」と弁明した。

ルイス・エチェベリアは2022年1月17日に100歳を迎え、同年7月に死去した。2008年、彼は1968年10月2日のトラテロコ虐殺および“汚い戦争”時代の強制失踪事件に関し、グスタボ・ディアス・オルダスと共に共謀したとして、過去の社会・政治運動特別検察局から訴追を受けた。彼はメキシコ初の

元大統領としてジェノサイド容疑で逮捕状を2度発行され、自宅軟禁の後、2009年に無罪放免となった人物である。

2018年、三度目の挑戦で大統領に就任したのは、かつての元PRI黨員であった。彼は古き“巨大政
党”の儀式を蘇らせ、メキシコ史上の偉業を継ぐと自称する“進歩的でリベラルな政権”の名の下に、
旧PRIの変種が新たな姿で復活した。

それが、アンドレス・マヌエル・ロペス・オブラドール前大統領が名づけた「第四の変革(Cuarta
Transformación)」である。だが実際には、その体制は保守的で、時に反動的ですらあり、再び強権
的大統領制を蘇らせ、可能な限りの権力を集中させようとしている。PRIの時代は完全には終わっ
ていない。

1887年4月、イギリスの歴史家で政治家のロード・アクトンが、マンドール・クレイトン大司教への書簡
の中でこう記した。

「歴史的責任は、法的責任の欠如を補わねばならない。権力は腐敗する傾向を持ち、絶対的な権力
は絶対的に腐敗する。偉人と呼ばれる者たちは、権威ではなく影響力を行使する場合でさえ、しばし
ば悪である。ましてや権威を持ったとき、腐敗への傾斜は避けられない。地位がその保持者を神聖
化するという考えほど危険な異端はない。」

これらの言葉は、すべてのメキシコ大統領が読むべきものであった(そして皮肉にも、多くの大統領
が巨大な蔵書を持っていた)。それでも問いたい——なぜメキシコの政治家たちは、有能で誠実で効
率的な“プロフェッショナル”でいられないのか。友人の言葉を思い出す。「政治家は火星から来たわ
けではない。彼らは私たちの中から生まれる。家庭から、社会から。」政治家は私たち自身の教育と
文化の産物である。おそらく私たちは皆、少しばかり——いや、かなりの部分で——**プリイスタ(PRI的)**なのだ。

この本は、いまだ完全には終わりを迎えていない長い時代の確かな証言であり、貴重な視覚的記録
である。

ビクトル・ガジョルはこう述べている。

「カメラのシャッターを押すという複雑な行為——つまり“写真を撮る”という動作を指す動詞には、常
に意味の揺らぎが伴う。撮る(tomar)、作る(hacer)、引き出す(sacar)、放つ(tirar)、記録する(
registrar)、記述する(documentar)、肖像を残す(retratar)、捉える(captar)——これらは同義では
ないが、時と場所によって互いに置き換えられながら使われてきたのである。」

「曖昧な透明性——報道ドキュメンタリー写真における真実と表象のあいだ」『Relaciones』第35巻第
140号、ミチョアカン学院、2014年)

第三の呼び出し — メキシコに二つはない
— ロヘリオ・ビジャリアル

「一般に、人間社会は革新的ではなく、むしろ階層的で儀礼的である。
変化の提案は常に警戒をもって受け止められる。なぜならそれは、既存の儀礼や階層
の不快な変化——つまり、ある儀礼体系を別のものへ、あるいはより単純で儀礼の少
ない社会へと置き換えることを意味するからだ。
だが、社会が変わらざるを得ない瞬間というものが、いつかは訪れる。」
—カール・セーガン

私たちの国には、独立・改革・革命の時代を経て血と炎の中で混ざり合い、最終的に一つの旗、一つ
の国歌、一つの理念を与えられた数多の民族と文化が共存している。言語と宗教はスペイン王冠か
らの“贈り物”だった。

民族的・文化的に大きく異なる地域がいくつも存在するにもかかわらず、メキシコ人は同じ歴史、同じ
英雄——イダルゴ、ファレス、サパタ、ビリャ、カルデナスの胸像や銅像がその証——、同じ信条、同
じ理想を共有している。これこそがおそらく三色旗の党(PRI)の最大の功績であった。
すなわち、一つの領土としての統一を成し遂げ、私たちすべてに共通する“国の物語”を築いたので
ある。

その壮大な物語は、権力の座から描かれ、メディアの“必要な共犯”によって語り継がれた——テレ
ビ、ラジオ、映画、新聞がその語り部だった。

1982年、実業家でありテレビサの筆頭オーナーでもあったエミリオ・アスカラガ・ミルモは、ミゲル・
デ・ラ・マドリの大統領選キャンペーンに同行し、全行程を報道した。一方で、PAN候補パブロ・エミリ
オ・マデロの活動はほとんど取り上げず、彼が獲得した300万票は、デ・ラ・マドリの1600万票と比べ
て小さく見せられた。アスカラガはある声明でこう語った。

「我々はPRIと大統領の兵士である。」

俳優と観客 —ロヘリオ・ビジャリアル

1982年、PRI(制度的革命党)の候補者ミゲル・デ・ラ・マドリ・ウルタードが大統領選に勝利すること
を疑う者はいなかった。実際、彼は1982年から1988年までメキシコの大統領を務めた。当時、競争
の余地はまったくなかった。国家政党がすべてを掌握し、野党の参加は単なる“形式的”であり、“英
雄的”な行為にすぎなかった。

ペドロ・メイエルはそのPRI候補のキャンペーンを撮影したが、最初からその本質を理解していた。
それはサーカス——巨大な国家的サーカスだったのだ。
キャンペーンのすべての出来事は、綿密な演出と長年の経験によって構築された壮大な舞台装置と
して見ればこそ意味を持つ。すべては計画され、すべての人に役割が割り当てられていた。

メキシコ全土が舞台であり、サーカスのリングだった。
大都市も小さな町も、スラムも、農村も、先住民の村も——歴史的で痛ましい貧困を抱えたその地も
——。険しい山々、乾いた砂漠、密林、海岸、そして海。

自然と大地の豊かさそのものが舞台美術の一部を構成していた。

この国全体を覆う巨大なテントの下で、俳優であり同時に観客でもある人々が動いていた。彼ら自身、自分が二重の役割を担っていることを知らないままに。
メイエルの写真は、このサーカスの演出家たちが老若男女あらゆる社会階層の人々の参加を想定していたことを克明に示している。誰ひとり欠けてはならなかった。

人々は、あらかじめ決められた脚本どおりに配置され、演出上の衣装を与えられた。
先住民は伝統衣装を、若い女性は地域の民族衣装を、労働者は労組のジャケットを、医師は白衣を、子どもたちは制服を着せられた。
衣装の多様さと色彩の豊かさは圧倒的だ。
俳優であり観客でもある彼ら——男も女も——は、ショーのために装い、演じる。
演出家たちは、ポスターや横断幕、旗、色とりどりの風船を配り、役割に応じてそれを掲げさせる。

バンドやマリアッチ、さまざまな音楽グループ、そして有名歌手(あるいはそうでない歌手)たちが会場を盛り上げる。
大きなステージでも、小さな仮設舞台でも、紙吹雪が舞い、花火が鳴り響く。
俳優たちの顔には、参加する喜びや笑いがあふれているが、同時に退屈や疲労、抵抗の表情もある。
強制された役割を完全には演じきれず、内心では従うことを拒んでいる者もいた。

メイエルの眼差しは、選挙の勝敗がすでに決まっている状況では、候補者そのものが物語の主役ではないことを鋭く示している。
候補者は単なる“口実”であり、サーカスを成立させるための“導火線”にすぎない。
本当の主役は、スペクタクルそのものであり、それを演じる群衆という俳優たちであった。

ここに収められた写真群は、PRIが80年以上にわたって絶対的権力を握り続けたその間に繰り返された、政治サーカスの深層解剖である。
それは比類なき歴史的証言であり、同時にひとつの芸術作品でもある。

総稽古
— ロヘリオ・ビジャリアル

本書に収められた写真は、1980年末から1981年初頭にかけて撮影された17,000枚のネガの中から厳選されたものである。突然、キャンペーン幹部から「もう本を作る資金がない」と告げられ、プロジェクトは中断された。

ペドロ・メイエルのレンズが捉えたのは、メキシコ政治の中核を成す二つの柱——大統領と与党(PRI)——でありながら、真に重要なのはその周囲にいる人々、群衆、個々の存在だった。

彼の写真には、北から南へ、山岳から平原、熱帯の海岸に至るまで、互いに何の共通点もないかのような人々が次々と現れる。

官僚、事務員——油で固めた髪に立派な口ひげ、安物のテレリンカ製スーツを身にまとい——、そして慢性的な貧困に沈む先住民と農民。その無表情な顔立ちは、旗を振り笑う子どもたちや若者たちの無邪気で熱狂的な笑顔と鮮やかに対照を成している。

(ぜひ、マヤパンツとワラ草履を履きながら、手には新品のエルメスのアタッシュケースを持つ先住民たちの写真をじっくり見てほしい。)

電力労働者、石油労働者、几帳面な秘書、運転手、婦人会の代表、記者やカメラマンの群れ、クンビアやボレロ、ランチェラを歌うミュージシャンたち——ローラ・ベルトランの姿もそこにある——、気配りのきく給仕や助手たち、そしてザパタやビリャ、カランサ、オブレゴンとともに戦った革命の生き残りたち——まさに“血肉の偶像”とも呼ぶべき存在。

(ここで問いを立てずにはいられない——革命は彼らに正義をもたらしたのだろうか?)

この写真群には、全国を組織的に動員した**“生きた力(fuerzas vivas)”の姿が記録されている。彼らは、政権党PRIの支柱であり、六年ごとに繰り返される政治的儀式——市長選、州知事選、そして頂点たる大統領選——の舞台装置を支えた。

それは完璧に近い儀式**であり、キャンペーンのたびに洗練され、再現され、繰り返された。

登場する人々はまるで、風刺漫画家リウスの名作『ロス・スーペルマチョス』や『ロス・アガチャドス』から抜け出したキャラクターのようだ——カルソンツィン、ドーニャ・エメ、ドン・ペルペトウオ。

あるいはアベル・ケサーダの描く金満政治家や企業家たち。

彼らの多くは、ファン・ルルフォの短編やホルヘ・イバルゲンゴイティアの風刺的な年代記にも登場しそうな、メキシコ特有のカラフルで唯一無二の“人間動物誌”である。

さらに、弁護士の肩書を誇りつつ、帽子と口ひげをたくわえた典型的なメキシコ紳士たち——その姿は現代のアルマンド・グアディアナ上院議員にも重なる。彼は石炭業界の闇を抱え、脱税の疑いを持たれながらも、かつての巨大政党PRIの末裔——モレナ(国家再生運動)——の中で新たな顔をしている。

それは、終わることのないピカレスク——

PRI主義を支え、同時にそれを映し出す無限の風刺劇である。

プロセニオ
— ロヘリオ・ビジャリアル

いまの若い世代の中で、ペドロ・メイエルが1995年にウェブサイト zonezero.com を立ち上げる以前の活動を知る者はほとんどいない。たとえば、1965年のオーディオビジュアル作品『チャプルテペクの日曜日(Un domingo en Chapultepec)』や、当時アレハンドロ・ホドロフスキーと共に雑誌『Sucesos』のために演出した数々の写真劇——たとえば断崖の縁で裸体の女優スナ・カミニを撮影したあの忘れがたい一枚——。

また、1968年の学生運動を記録した写真のいくつかは、1971年に出版社エラ(Era)の編集者たちによって、エレナ・ポニアトウスカの著書『トラテロルコの夜(La noche de Tlatelolco)』とルイス・ゴンサ

レス・デ・アルバの『あの日々とあの年々 (Los días y los años)』の表紙に使用された。いずれもクレジットは安全上の理由で掲載されなかった。前者についてマルタ・カステジャノス(2005)はこう述べている。

「それは反乱の象徴的なイメージであり、祝祭的な雰囲気の中で若者たちが棺を担ぎ上げる——それは大学の自治の死を意味していた。」

1971年9月、雨に濡れた夜に開催されたロック&ホイールズ・フェスティバル(Avándaro)の写真も、また彼の代表作のひとつである。さらに、1978年のニカラグアで撮影したサンディニスタ・ゲリラの写真、そして本書の主題である1980～1981年のPRI候補ミゲル・デ・ラ・マドリの大統領選キャンペーンの記録もその重要な仕事に含まれる。

1986年、メキシコシティ近代美術館で開催された展覧会『Los otros y nosotros(彼らと私たち)』や、1988年の石油国有化50周年記念のためにペメックスから依頼された写真シリーズ——それらをもとに制作された書籍は、あまりにも批判的な内容であったため、完成後に倉庫に封印された——を知る者も少ないだろう。

そうした流れの中で生まれた本書は、単なる写真集ではない。メキシコ現代史そのものを語る、真のビジュアル・クロニクルなのである。

略歴(SEMBLANZAS)

ペドロ・メイエル

若いころから写真家を志したが、当時メキシコには正式な写真学校が存在せず、独学で技術を身につけた。彼の歩みは常にテクノロジーと視覚的ナラティブの交差点を探求する旅であった。

グループ・アルテ・フォトグラフィコ(Grupo Arte Fotográfico)を設立し、最初のラテンアメリカ写真コロキウムを推進、さらにメキシコ写真評議会(Consejo Mexicano de Fotografía)を創設した。

その後、インターネット上で初めて写真作品を発表するサイト ZoneZero を立ち上げ、世界中の1,500名以上の写真家の作品を紹介した。

CD-ROM 写真作品の先駆け『Fotografía para recordar(記憶のために撮る)』を発表し、回顧展『Herejías(異端)』は17か国・60を超える美術館で開催された。

また、ペドロ・メイエル財団(Fundación Pedro Meyer)とフォト・ムセオ・クアトロ・カミーノス(Foto Museo Cuatro Caminos)の創設者でもある。

2020年以降は、自身の60年にわたる創作活動を集大成するミラマール・コレクション(Colección Miramar)の制作に取り組んでおり、変化の時代におけるイメージ、記憶、そして生の意味を探求し続けている。

ロヘリオ・ビジャレアル

ジャーナリストであり、デジタル雑誌Replicante (revistareplicante.com)の編集長、大学教授。

物語・ジャーナリズム・クロニカの分野で複数の著書を持ち、最新作は電子書籍版『¿Qué hace usted en un libro como éste?(こんな本にあなたがいるのはなぜ?)』(2015–2022)。

1984年に批評・文化・ユーモア誌La Regla Rotaを、1989年にはLa Pus modernaを創刊。国内外の雑誌に寄稿し、複数の共同執筆書籍にも参加している。

(写真: マヌエル・サバラ撮影)

ルベン・アギラール

メキシコの学者・ジャーナリスト・政治コミュニケーションの専門家。元イエズス会士であり、かつてエルサルバドルでゲリラ運動に参加した経歴を持つ。

ピセンテ・フォックス政権では大統領報道官を務めた。

イベロアメリカ大学で社会科学博士号を取得し、大学教授として教鞭を執るほか、国内外の政府・国際機関におけるコミュニケーション戦略コンサルタントとしても活動。

20冊以上の著書を持ち、『Animal Político』や『Nexos』などのメディアで定期的に寄稿している。

アレクシス・オルティス

マルチディシプリナリーなヴィジュアルアーティスト。知覚、記憶、想像力、領域、アイデンティティ、時空の概念を軸に、人間が現実を構築する方法を問い直すナラティブを生み出している。

その作品は国内で広く発表され、写真・ビデオアート・ビデオインスタレーション・音楽・詩・批評的テキストなど多様なメディアを横断する。

現在はペドロ・メイエルとともにミラマール・コレクションの編集者兼デザイナーとして活動し、同時にペドロ・メイエル・ギャラリーのキュレーションと展示構成も担当している。

略歴

1. フィデル・ベラスケス (Fidel Velázquez, 1900–1997)
メキシコ州ニコラス・ロメロ出身。PRI政権下で最も影響力のあった政治家・労働組合指導者の一人であり、**メキシコ労働者総連合 (CTM)** の指導者として半世紀以上にわたり権勢を誇った。
2. エンリケ・デ・ラ・マドリ (Enrique de la Madrid, 1962–)
メキシコシティ出身の弁護士・政治家・コラムニスト。2015～2018年にメキシコ観光庁長官を務め、2024年大統領選の有力候補とされている。
3. マヌエル・バルトレット・ディアス (Manuel Bartlett Díaz, 1936–)
プエブラ出身の政治家。元内務大臣・文部大臣・プエブラ州知事・上院議員。2018年12月、ロペス・オブラドール大統領により連邦電力委員会 (CFE) 総裁に任命された。DEA捜査官キキ・カマレナ殺害事件 (1985年) への関与疑惑や、1988年の**「システムダウン」選挙不正事件**で物議を醸した。
4. パロマ・コルデロ・デ・ラ・マドリ (Paloma Cordero de De la Madrid, 1937–2020)
ミゲル・デ・ラ・マドリの妻。敬虔なカトリックの家庭に生まれ、修道院系学校で学ぶ。大統領

夫人として**DIF(国家家族総合開発システム)**およびボランティア団体を率い、社会福祉事業を支援した。

5. ホアキン・ガンボア・パスコエ(Joaquín Gamboa Pascoe, 1922–2016)
弁護士・労働組合指導者。2005年から没年までCTM書記長を務め、上院議員・PRI多数派代表などを歴任。
6. ウンベルト・ルゴ・ヒル(Humberto Lugo Gil, 1934–2013)
イダルゴ州出身のPRI政治家。下院議員・上院議員・**イダルゴ州暫定知事(1998–1999)**を務めた。
7. ベアトリス・パレーデス(Beatriz Paredes, 1953–)
トラスカラ出身の社会学者・政治家。UNAM卒、バルセロナ大学で文学を専攻。トラスカラ州知事(1987–1992)、CNC全国指導者、PRI党首、駐ブラジル大使を歴任。
8. サルバドル・バラガン(Salvador Barragán, 1932–2001)
タンピコ出身の石油労働者組合指導者。「ラ・キナ」の側近で、**1989年の“キナソ事件”**で逮捕・失脚。その後釈放され、2001年に死去。
9. ホアキン・エルナンデス・ガルシア「ラ・キナ」(Joaquín Hernández Galicia, 1922–2013)
石油労働者全国組合(STPRM)の長期指導者。1989年、サリナス政権によって逮捕され、事件は政治史に残る**「キナソ(quinazo)」**として知られる。
10. フアン・ルルフォ(Juan Rulfo, 1917–1986)
作家・写真家・編集者。代表作に『燃える平原(El llano en llamas)』(1953)、『ペドロ・パラモ』(1955)。民族誌出版にも尽力した。
11. フアン・オゴルマン(Juan O’Gorman, 1905–1982)
建築家・画家。ル・コルビュジエに影響を受け、ディエゴ・リベラとフリーダ・カーロのスタジオ兼住宅を設計。IPNで建築工学科を創設。
12. アブラハム・サブルドフスキー(Abraham Zabludovsky, 1924–2003)
ポーランド系ユダヤ人建築家。UNAM建築学部卒。モダニズム建築を推進し、マリオ・パニの事務所出身。著名ジャーナリスト、ハコボ・サブルドフスキーの兄。
13. エクトル・アギラル・カミン(Héctor Aguilar Camín, 1946–)
歴史家・作家・ジャーナリスト。雑誌『Nexos』編集長(1983–1995, 2008–)。出版社Cal y Arena創設者。テレビ番組『Zona Abierta』『Tercer Grado』に出演。
14. アンヘレス・マストレッタ(Ángeles Mastretta, 1949–)
作家・ジャーナリスト。代表作『Arráncame la vida』(1985)でマサトラン文学賞受賞。女性像を鮮やかに描く作風で知られる。

15. ソコロ・ディアス・パラシオス(Socorro Díaz Palacios, 1949–)
コリマ出身のジャーナリスト・政治家。『El Día』紙初の女性編集長。文化報道で1977年国家報道賞受賞。後に内務次官、ISSSTE・Liconsaの長を歴任。
16. エミリオ・ガンボア・パトロン(Emilio Gamboa Patrón, 1950–)
PRIの重鎮。大統領秘書、通信運輸大臣、上院・下院議員。2006–2009年にPRI会派代表を務めた。
17. カルロス・サリナス・デ・ゴルタリ(Carlos Salinas de Gortari, 1948–)
経済学者・政治家。デ・ラ・マドリ政権で予算計画庁長官を務め、1988年にPRI候補として大統領に当選。不正選挙疑惑でメキシコ政治史に論争を残す。
18. アルフォンソ・コロナ・デル・ロサル(Alfonso Corona del Rosal, 1906–2000)
軍人・弁護士・政治家。ロペス・マテオス政権期のPRI党首、および**メキシコ市長官(1966–1970)**を務めた。
19. クアウテモク・カルデナス・ソロルサーノ(Cuauhtémoc Cárdenas Solórzano, 1934–)
元大統領ラサロ・カルデナスの子。1988年大統領選で民主戦線候補としてサリナスと対決。後にPRDを創設し、**メキシコシティ初の選挙制首長(1997)**となった。
20. グリセルダ・アルバレス(Griselda Álvarez, 1913–2009)
メキシコ初の女性州知事(コリマ州, 1979–1985)。教育改革と文化推進に尽力し、フェミニズムを提唱。
21. ナチョ・ロペス(Nacho López, 1923–1986)
フォトジャーナリズムの先駆者。日常生活・都市建築・舞踊などを主題に、40を超えるフォトエッセイを制作。ペドロ・メイエルとともに1978年の第1回ラテンアメリカ写真コロキウムを企画。
22. アルマンド・デル・カスティーリョ・フランコ(Armando del Castillo Franco, 1918–2006)
イダルゴ出身の政治家・弁護士。PRI所属。下院・上院議員、**イダルゴ州暫定知事(1975–1976)**として教育・インフラ整備を推進。
23. ペドロ・オヘダ・パウリャーダ(Pedro Ojeda Paullada, 1934–2012)
弁護士・政治家。ルイス・エチェベリア政権で連邦検事総長(1971–1976)、ロペス・ポルティージョ政権で労働相、デ・ラ・マドリ政権で漁業相を歴任。
24. ハビエル・ガルシア・パニアグア(Javier García Paniagua, 1935–1998)
元連邦保安局長官・農地改革相。1981年のPRI大統領候補指名争いで敗れ、後に労働相に就任。国家警察の「汚い戦争」時代に関与した人物とされる。
25. ビクトル・セルベラ・パチェコ(Víctor Cervera Pacheco, 1936–2004)
ユカタン州出身のPRI政治家。**ユカタン州知事を2期(1984–1988, 1995–2001)**務め、地

域開発と社会政策を推進。

26. アルフォンソ・マルティネス・ドミンゲス (Alfonso Martínez Domínguez, 1922–2002)
ヌエボ・レオン州モンテレー出身。1970–1971年にメキシコ市長官を務めた。2002年、
1971年「木曜の虐殺事件(コーパス・クリスティの虐殺)」の責任を問われた。

注釈および参考文献 (NOTAS Y REFERENCIAS)

Aguilar Camín, Héctor (2021). 「Priología」および「Priología 2」, *Milenio*.

URL: milenio.com/opinion/hector-aguilar-camin/dia-con-dia/priologia

および milenio.com/opinion/hector-aguilar-camin/dia-con-dia/priologia-2, 2021年10月7・8日。

Casasola Zapata, Gustavo (1992). *Historia gráfica de la Revolución Mexicana, 1900–1970*. メキシコ: Trillas.

Castellanos, Alejandro (2005). 「Realismo crítico digital」,

英語版: *The Real and the True: The Digital Photography of Pedro Meyer*. Berkeley: New Riders Press.

Ceberio, Jesús (1982). 「La campaña electoral más dura y costosa que se recuerda」, *El País*, 1982年6月30日。

Córdova, Arnaldo (1989). 「La transformación del PNR en el PRM: el triunfo del corporativismo en México」,

収録: *La Revolución y el Estado en México*. メキシコ: ERA.

Cosío Villegas, Daniel (1972). *El sistema político mexicano*. メキシコ: Joaquín Mortiz.

El País (1990). 「Vargas Llosa: ‘México es la dictadura perfecta」」,

URL: elpais.com/diario/1990/09/01/cultura/652140001_850215.html, 1990年8月31日。

Gayol, Víctor (2014). 「La opaca transparencia. Entre verdad y representación en la imagen fotoperiodística documental」,

Relaciones, El Colegio de Michoacán, 第140号, pp. 109–126.

González, René (2012). 「Las campañas por la presidencia de México: Del origen del PRI al 1 de julio de 2012」,

Replicante. URL: revistareplicante.com/las-campanas-por-la-presidencia-de-mexico/

および「Historia del PRI」, priedomex.org.mx/frmHistoria, 2012年6月13日。

Krauze, Enrique (2016). *Por una democracia sin adjetivos, 1982–1996*. メキシコ: Debate.

López Rubí Calderón, José Ramón (2021). 「López Obrador y el PRI, ¿qué tan diferentes son?」,

Replicante. URL: revistareplicante.com/lopez-obrador-y-el-pri/, 2021年6月12日。

López Velasco, Rocío et al. (2012). 「Turismo y contaminación ambiental en la periferia urbana de Acapulco: Ciudad Renacimiento」,

El Periplo Sustentable, 第23号, プエブラ自治大学 (BUAP), 2012年7-12月。

Ontiveros, Victoria (2019). 「El PRI, 70 años dominando México」, *El Orden Mundial*.

URL: elordenmundial.com/el-pri-dominando-mexico/, 2019年8月25日。

Sagan, Carl (2016). *Los dragones del edén*. メキシコ: Booket Paidós.

Sánchez González, Agustín (2013). 「Fidel Velázquez, pilar del sistema político posrevolucionario」,

Relatos e Historias de México, 第54号, 2013年2月。

ミラマール・コレクション 今後の刊行予定 (PRÓXIMOS TÍTULOS DE LA COLECCIÓN MIRAMAR)

- アルゴリトモス (Algoritmos)
- オウトレトラス (Autorretratos / セルフポートレート)
- アバンダロ 1971 (Avándaro, 1971)
- コロニア・アフスコ (Colonia Ajusco)
- キューバ 1979–2009 (Cuba, 1979–2009) [全2巻]
- デル・アキ・アル・マス・アジャ (Del aquí al más allá / 此岸から彼岸へ)
- ドウランテ・エル・68 (Durante el 68 / 1968年の只中で)
- フォトグラフィオ・パラ・レコルダール (Fotografía para recordar / 記憶のために撮る)
- ウエフウトラとその他の町々 (Huejutla y otros pueblos)
- イストリルコ・エル・グランデ (Ixtililco El Grande)
- ラ・ミステカ (La Mixteca)
- ラス・トルーチャス — シウダー・ラサロ・カルデナス (Las Truchas, Ciudad Lázaro Cárdenas)
- ロス・コエテス・ドウラロン・トド・エル・ディア (Los cohetes duraron todo el día – 改訂版)
- テスティモニオス・サンディニスタス 1978–1984 (Testimonios sandinistas, 1978–1984)
- ウン・エクアドル 1982–2010 (Un Ecuador, 1982–2010) [全2巻]
- ビルヒリオ (Virgilio)
- ユマ 1984–1989 (Yuma, 1984–1989)

そして、さらに23タイトルが現在制作中である。

ミラマール・コレクションの各作品について
詳しい情報をご覧になるには、QRコードをスキャンしてください。

<https://pedromeyer.com/es/miramar/>

このコレクションの制作にご協力くださった
すべての方々、機関、そして関係者の皆様に
心より感謝申し上げます。
写真家 ペドロ・メイヤー の作品保存と発信のために
ご支援とご尽力をいただきましたことを、深く御礼申し上げます。



著者のことば

本書に誤りや不備があるとすれば、それはすべて私の責任です。
すべてを完璧に仕上げる手立てを持ち合わせてはいませんが、
それでもこの本を世に出したいという願いの方が大きいのです。
親愛なる読者の皆さまには、
完璧を求めることと最善を尽くすことのあいだにある
その繊細な均衡をどうかご理解いただければ幸いです。

ペドロ・メイヤー財団(Fundación Pedro Meyer, A.C.)は、
著作権とコピーライトの保護を支持しています。
これらは創造性を育み、知と思想の多様性を守り、
自由な表現を促し、生きた文化の発展に寄与するものです。

本書の正規版をお求めいただき、
著作権およびコピーライトの法を尊重してくださることに感謝いたします。
その行為こそが、創作者を支え、
財団が文化活動を継続して推進していく力となります。

本書に収められた写真の大部分は、
写真家 ペドロ・メイヤー 自身による作品です。

本書は、メキシコ・オアハカ州サンタ・マリア・デル・トウレにある
Repro.Gráfica, S.C. の印刷工房にて、
2025年11月に印刷を完了しました。

© エル・テアトロ・ユニベルサル(*El Teatro Universal*), ペドロ・メイヤー
初版 2025年

本版は次の限定部数で構成されています。
クラシック・シリーズ 200部(通し番号入り)
ギャラリー・シリーズ 50部
コレクターズ・シリーズ 50部

番号: _____



PEDRO MEYER